

校内研究

研究テーマ「自分の学びをつくる子ども」

1 はじめに

「様々な活動の基盤となる知識、技術が急速に更新されていく社会になっている。」
「日本では『友人、同僚、その他の人』との交流が『全くない』あるいは『ほとんどない』と回答した人の割合が15.3%で、OECDの加盟国20か国中最も高い割合となっている。」

これらは、子どもたちが生きている今の社会をとらえた表現の一例である。今後、これに留まらず、社会的変化はますます加速度を増すと言われ、子どもたちが生きていく未来の社会がどのようなものになるのか、その予測が一層困難になっている。このような時代であることに改めて思いを致す時、身の回りの人々や出来事との関わりを自らつくり出し、それらを契機として自分の在り方を吟味・更新し続けていく力をもつことは、子どもたちにとって、よりよい社会と幸福な人生を切り拓く力となるのではないかと思う。

本校では、この考え方をベースに「教える側の意図でパッケージングした学習」から「子ども自身がストーリーとして紡ぐ連続した学び」へと、子どもの学校での学習経験の在り方の転換を進めてきた。合わせて、求めていく子どもの育ちを「自分の学びをつくる子ども」とした。

ここで、子どもはどのように活動することで自分の学びをつくっているのかについて、学習中の様子をもとに具体的にまとめておきたい。

【自分の学びをつくる子どもの学習の様子】

- ①自らの問題意識(願い、希望、不安、気がかり等)が立ち上がっている
- ②学習方法を考え、選択している
- ③必要な時に協働している
- ④試行錯誤を繰り返している

更に、子どもが深まりのある学びをつくれていることが大事であるという考えに立ち、「どのような問題についてどのように学んだか」や「自分の学びの成果と課題は何か」といった観点についてしっかりと評価できるような基準、言ってみれば、学びのものさしを一人一人がもつことが大切であると考えて取り組んでいる。

また、いずれのことについても、子どもが「うれしい」「なりたい自分に近づくことができた」や「学んでよかった」といった実感を併せ持っているかどうかは、生涯にわたって自分の学びをつくる原動力へとつながっていく大変重要な鍵であり、小学校段階からそういった実感を積み重ねていくことに重きを置きたいと考えている。

以上のことを礎として、不断に、研究主題「自分の学びをつくる子ども」が育つ学習づくりの要件について問い直し続けることで、本校が大切にしてきた学校での子どもの学習経験の在り方について常に整理をすると共に、実践を進めていきたい。

2 「自分の学びをつくる子どもが育つ単元づくり」の要件を見つめる

(1) 子どもが自分をよく知ろうとする単元構成となっているか

子どもが自分の学びを進めていくためには、その都度の“今の自分”をとらえることがベースとなる。今の自分をとらえるには、学習で自分が感じている思いと正対することがスタートとなる。その上で、自分の思い（達成感や不全感、学習意欲の変化等）を手掛かりに内省し、次の学習の具体的な見通し等をもつことにつなげていく姿を期待したい。このような自分をよく知ることにつながる活動を子どもと相談しながら柔軟に単元の中に位置づけていくこととする。

集団思考過程	自分を知るための活動① ・子どもの思い(前単元までの達成感や課題意識, 学習意欲等) ⇒単元計画づくり ・(教科の本質につながる)見方・考え方を働かせて知識(技能)をとらえる
個別追求過程	・自分に合った学習材、学習環境等とどのように関わるかを考えて学習を計画し、実践する 自分を知るための活動② ・子どもの思い(自学自習の達成感や課題意識, 学習意欲等) ⇒評価・単元計画の見直し/修正
集団思考過程	・(話し合い活動等を通して、)知識(技能)を関連付ける、組み合わせる 自分を知るための活動③ ・子共の思い(相互学習での達成感や課題意識, 学習意欲等) ⇒自分のよさと課題の自覚

また、この時間は自分の学びを自覚する時間ともなっており、子どもが「学習を俯瞰した見通し」「学習方法の選択」「学習方法の修正」「自分のよさと課題の自覚」等をより効果的なものにするために、以下の4つの場面で自分の学びを自覚するための言語活動も合わせて設定することが効果的だと考えている。

- | |
|---|
| ①新しい学習と出会う場面 ②学習のめあてや計画を立てる場面
③仲間の学びに触れる場面 ④学習を振り返ったり修正したりする場面 |
|---|

(2) 子どもが自分のものさし(見方・考え方)を磨きながら学習を進める単元構成となっているか

子どもが自分の学びを深めていくには確かな自己評価が鍵となる。確かな自己評価とは、子どもが自分の学びを見つめた振り返りを行う時に、自分の満足感等を「出来るようになったり、分かるようになったりしたのはなぜか」という観点から、学習中に働かせた見方・考え方について、その有効性を吟味することである。

一人一人に吟味する姿が見られたならば、どのような学習活動でどのような見方・考え方を働かせたことが有効だったのかを子どもと確かめ合うことができるし、仮に、自分の

学びの現在地を適切に把握できていなかったとすれば、どのような見方・考え方を働かせて学習を進めることが必要だったのかを子どもと共に検証していくことができる。いずれにしても、子どもの学習の満足感等と学習で見方・考え方を働かせることは大切であるという思いがつながることで、見方・考え方そのものについて磨いていくことになると考えている。そのために、内容研究を通して、子どもの学習の深まりにつながると考えられる「見方・考え方」の予測をしっかりと行うことが大切である。

＜見方・考え方の予測と学習場面＞

- ①教材・題材の価値を考える
- ②教材・題材の価値に関係付けて子どもの学習の実態をつかむ
- ③教材・題材との出会いでどのような「問い」や「願い」をもつか予想する
- ④単元での子どもの思考過程を予想することと合わせて、単元でどのような「見方・考え方」を働かせることがよりよい学習となるか吟味する。

3 「自分の学びをつくる子ども」を支える学習活動

「トークタイム」と「一人清掃」の2つの活動は、毎日の学習の豊かさを支える時間となることを目指していく。

(1) お互いの考え方や歩み方を受け止め合うトークタイム

トークタイムでは、感覚や感情を分かち合う親和的コミュニケーションや、思いや気持ちを分かち合う心情交流的コミュニケーション場面が多く展開されるようにと考えている。このようなコミュニケーションのある学習活動を通じて、仲間の話（思い）をどのようにとらえている自分なのかを見つめ、それを言葉で表現し、受け止め合う時間となるようにしていきたい。自分や仲間の心の背景を互いに聞き合い、改めて自分のよさや成長についての思いを確かにしたり、仲間への共感を深めたりしていく時間を目指していく。

(2) 身の回りの様子に心を傾け、生活のベースを整える一人清掃

一人清掃では、“みんなでつくる学校”の意識のもとに、一人一人が「働くこと」を見つけ、粘り強く活動することを期待している。そのために、「めあて」と「方法」を確かにして、工夫しながら活動している様子をとらえ、お互いに認め、励まし合う場면을効果的に設けることとしている。更に、活動の節となる場面では、「活動方法」「活動範囲」

「活動に対する意識の変化」の把握に基づいて、その価値に触れる時間をもつことで、一人清掃を通じた成長と課題を確かめ合い、「してもらう生活」から「する生活」へ意識の高まりを目指していく。